



JAPAN INTERIOR DESIGNERS' ASSOCIATION

'64年 7・8月号

—— 目 次 ——

- ① 作品集発行等を決める
箱根で理事会を開く
 - ☆ 前年度本部会計決算等
 - ☆ 作品集発行について
 - ☆ 標準仕様書
 - ☆ 定款および細則改正
 - ☆ 賛助会員の取扱いについて
 - ☆ その他雑件について
- ② 理事会を前に委員会東京大阪両支部
(本部は260字 見出し2行)
(7日原稿出る)
- ③ 屋内競技場を見学
東京支部例会54名が参加
- ④ デザインの方法論
＝東京・パネルディスカッション＝
- ⑤ 新入会員御紹介
- ⑥ 会員の近況
- ⑦ 事務局だより

日本室内設計家協会

— 作 品 集 発 行 等 を 決 め る —

定款の全面的改正も

箱根で理事会開く

本年度第一回の理事会は7月27日～28日の両日にわたり、箱根春光荘で開催された。

出席者

理 事 長 狩 野 雄 一

理 事 山 口 勇次郎 竹 内 篤 中 村 圭 介

榎 田 均 坂 田 種 男（委員代理出席）

飯 田 俊 彦 川 崎 浩 渡 辺 敏 雄

森 岡 正（委員代理出席）

委 任 者（岩 瀬 要 三 長 大 作 豊 口 克 平

松 村 勝 男 樋 口 治 岡 村 実

野 口 茂）

監 事 中 村 富 夫

会議はまず、狩野理事長の『協会の内容を充実させ、内外の体制を確立し、新しい事業を計画する重要な理事会であり充分審議してほしい。又、新入会員の増加により世代の交代の時季にきているむね、挨拶があり議案の審議に入った。

1. 前年度本部会計決算及び勘定科目の変更について

前年度本部会計については、5月号既報通りで、東西両支部保管の本部会計について正式に承認するとともに次の附帯事項を決定した。

(1) 昭和37年度以前よりの会費未納者（東京20名大阪7名決算時）についてに定款第13条2項により除名通知を3ヶ月の予告を置いて発送する。予告期間中に会費を納入するか一部会費を納入して納入計画を明らかにするよう努力する。

(2) 勘定科目の変更（大阪提案）

本年度より本部会計勘定科目を次のように変更する。

A 収 入 の 部

No.	科 目	備 考
1	前 年 度 繰 越 金	未収入金，未払金は計上しない。
2	入 会 金	正会員・特別会員 ￥1,000 準会員 ￥500
3	本 部 会 費	正 会 員 会 費 年額 2,400 円
4		特 別 会 員 会 費 年額 2,400 円
5		準 会 員 会 費 年額 1,200 円
6		賛 助 会 員 会 費 1口 20,000 円 5口以内
7	各支部よりの受入金	支部より本部への送金
8	雑 収 入	寄付金，銀行利息，報酬規定，仕様書，名簿などの販売代金，会報の広告掲載料などの収入とする。

B 支 出 の 部

№	科	目	備 考
9	会 議 費	理 事 会 会 議 費	理事会の会場費，理事会出席の本部役員（委任者を含む）の宿泊費，旅費などとする。
10		小委員会会議費	専門委員会，理事長，支部委員長会議などの宿泊費，旅費などとする。
11	事 業 費	会 報 費	機関紙，会報，名簿の印刷費などとする。
12		調 査 資 料 費	建築，家具などの専門図書雑誌購入の資料費，会員の作品整理の為購入する雑誌の調査費とする。
13	事 業 費	雑 費	上記以外，事業に要する一切の費用とする。但し，専門委員会としての会議費，通信費は夫々の科目とする。各事業毎に計上する。
14	庶 務 費	人 件 費	事務局長手当および事務員の給与手当とする。
15		事 務 所 費	事務所の賃借料および事務所の改造，補修費とする。現在，大阪支部にてはなし。
16		什 器 備 品 費	事務所の家具，機械器具，金庫などの購入および補修費とする。
17		光 熱 費	事務所の電気，瓦斯水道などの料金とする。現在，大阪支部にてはなし。
18		消 耗 品 費	帳簿，ファイル，用紙，封筒，筆記用具などもとする。但し印刷屋にて印刷代に含まれるものは印刷費とする。
19		印 刷 費	議案書，案内状などの印刷代複写料などとする。但し事業として特に印刷するものは事業費とする。
20		通 信 費	案内状などの一切の郵便料金，切手，ハガキの代金，電信電話料金などとする。
21		交 通 費	各種連絡の為に市内外の交通費，講師などの送迎の為に交通費とす。但し支部委員会出席の為に役員交通費補助などは会議とする。
22		渉 外 費	講師，他支部役員などの接待費および協会ならびにその事業の広告料などとする。
23		雑 費	
24	配 布 金		賛助会員会費中その半額を各支部会員数に比例して配布する。各支部収入の部配布金合計と同額。
25	本 部 へ の 送 金		各支部保管の本部費の本部への送金とする。(7)と同額

以上の外、予算に於ては

○	予	備	費	を計上し、科目を流用して不時に備える。
---	---	---	---	---------------------

決算に当っては、会員会費の未収入分をチェックし

①	前年度末会費未納額	
②	本年度分・会費	
③	本年度分・会費実収額	
④	本年度末・会費未納額	① + ② - ③ = ④

を夫々本部会費、支部会費に分類して計上します。

2. 作品集発行について

作品集の発刊について東京支部より提案され一部修正し、下記のように決定しました。

尚、選考委員は東京6名～7名、大阪3名～4名、計10名程度とし次回理事会で決定する外、年次委員としては、豊口克平（長）、山口勇次郎、松村勝男、渡辺 優、斉藤英夫（以上東京）、川崎 浩（大阪）を決定し出版社との交渉・作品募集の具体化を計ることになった。

作品集（年鑑）発行計画

1. インテリア デザイン年鑑基本企画

- 1) 昭和40年3月中発刊
- 2) J I Dの組織を通じて、インテリアデザインの代表的作品を編集し、日本における最も権威ある年鑑とする。（注、当初は2年に1回とする）
- 3) 名 称 「日本インテリアデザイン年鑑 65」
- 4) 著 者 J I D
- 5) 出 版 美術出版社

編集及び出版に関する費用は一切出版社の負担とする。

6) 発行部数 2,500部

参考 広告年鑑 4,000部 建築年鑑 4,000部

J I D A 2,500部

7) 正会員は必ず1部以上購入の義務がある。

2. 年鑑の内容

- 1) 集録作品はJ I D会員を主体とし、その他の優秀作品と集録する。
- 2) 集録は選考制とし、会員による各分野のオーソリテイによって構成する専門委員会を組織して、これに当り理事会の承認を得たものを年鑑委員が編集する。(10程度)

3) 年鑑委員及選考委員は理事会において決定し理事長はこれを依嘱する。

4) 内容の分類

A インテリア B 家具

C デイスプレイ D その他

5) 原稿

写真, 作品名, 寸法, 特徴, データ(図面) メーカー名, 時期(年)
意匠登録番号

会員は5点を提出し、選考委員で1点を原則として選ぶ。

6) 英文付

7) サイズ A4

8) 色刷 (?)

9) 発刊について(理事長)

10) 年間発刊後の動きについて評論及び各分類の解説

11) 会員名簿

3. 広告その他

1) 広告は会員が協力して増やす。 約50頁

1頁 3~4万円程度 (依頼文を印刷する)

2) 頁数は約200頁 200点

3) 表紙およびレイアウトはグラフィックデザイナーに依頼する。

3. 標準仕様書

標準仕様書作成方針案について東京支部より提案され、一部修正ののち、下記のように決定されました。

標準仕様書作成方針

日本屋内設計家協会

A 仕様書作成の主旨

家具及び内装の設計管理を行うに必要な標準仕様書を作成し、会員に頒布し、業務に利用すると共に専門用語の統一を計る。

B 業務の分担

本部事業として東西両支部で別々に原案作成の小委員会を編成し、小委員会案が完成されたら、両支部に配布しそれぞれの支部の審議を経て、理事会で決定する。

その内容を

- (1) 一般条件
- (2) 材料
- (3) 構造及び工作

☆ 第一次計画 (昭和39年中に原案作成, 40年中に完成)

家具(造付家具を含む)カーテン(ブラインド)..... 東京
内装一般(敷物を含む)..... 大阪

☆ 第二次計画 (昭和41年以降)

ディスプレイ, 自動車..... 東京
船舶, 車輛(自動車を除く)航空機等..... 大阪
(第一次第二次区分は支部の都合で変更できる。)

用語の統一については、小委員会案の交換後両支部で検討する。

4. 定款および細則改正案

現行定款は、理事会の運営監事の選出、準会員の取扱い等不明の点が多く内容、字句等のあやまりが多いので、全面的に改正することとし、大阪支部に立案を附記してあったが、飯田理事より提案され一部修正し別稿（総会議案として別に配布する）のように決定を見た。

尚、定款本文については各支部全会員数の $\frac{3}{4}$ 以上の賛成が必要なので各支部ごとに説明会を開きその後各条文ごとに記名通信投票を行うことになった。

5. 賛助会員の取扱いについて

賛助会員は東京、大阪等、所属支部の区分は行わない。但し連絡責任者に対する連絡は本部で行う外、その責任者の所在地の支部からも支部の事業等について連絡をする。

従って全国的規模を持つ賛助会員については、支部所在地の各支店に連絡責任者を設けることができるが、この場合の加入口数は原則として連絡を必要とする支部数以上の口数とする。

東京松屋、京都産業の加入申込は承認することとし、今後の新規申込については、『材料メーカーとして信頼できる材料又は部品を製作（業種により問屋を含む）し、設計管理業務に利害関係のある施工を主体としないもの』という、わくに従って支部で判断して決定しても良いが、理事会に報告し事後承認を求めるものとする。

領収書は支部で仮領収書を発行し、支部からの報告により本部が発行する。

会員の資格の発効は、会費納入の日より1年とし、特に年度は設けないが、年度中に会費を納入した者を持ってその年度の賛助会員とする。

現在入会したもの下記の通り

日東化学KK、松下電工KK、日立化成工業、富国株式会社、関ヶ原
石材KK 千代田グラビヤ印刷KK 東洋紡インテリア・住江織物 ラ
イト製作所

入 会 確 定

川島織物 日東紡KK 東京松屋 京都産業

6. その他雑件について

（イ）会報

会報は会の活動報告だけでなく、なるべく資料等の充実を計る。このため会員の協力を求め、投稿等も促進する。

（ロ）事務局員の昇給

事務局員桂田早苗さんの給与を8月より1,000円昇給する。次年度よりは予算に組み入れるものとする。

（ハ）弔慰金について

弔慰金については、会の財政より考慮し当面正会員及び準会員死亡の場合のみとし次の金額を基準とし所属支部会計より支出する。

正 会 員 10,000円（花輪代等を含む）

準 会 員 5,000円（花輪代等を含む）

（ニ）役職分担事務取扱いについて

本部事務局長及び会計担当 岩 瀬 要 三 理事

大阪支部保管会計担当 飯 田 俊 彦 理事

大阪支部連絡責任者 川崎 浩 理事

東京支部連絡責任者 中村 圭介 理事

支部の集会等の通知は出張等による他支部会員の出席等の便宜を計るため他支部事務局に連絡する。

（ホ）配布金額の決定

本部よりの配布金額は支部決算の都合上2月末で締切り実額を決定する。

（ヘ）九州支部発足について

本理事会で九州支部，3名の入会が承認されたので，同地区の会員は9名となり10月を目標に支部結成を計る。

その具体的事項は山口理事に一任し，結成のための諸費用は本部負担とする。

理事については，次年度より定款に従って選出するが最底1名は確保する。

（ト）入会申込の取扱

推薦者は支部委員会に出席し説明を求める。理事会の承認は，年2回の理事会で行うを原則とし，持ち廻りで行った場合は理事の内1人でも異議ある場合は次回理事会まで保留する。

（チ）入会及び退会

正会員入会者

幸重 峰尾 土屋 漆原美代子 大和 (以上東京)

(別記紹介参照)

正会員退会者

飯田 隆 祥 (三越家具株式会社設計室) 今回設計業務を離れましたので退会されました。

屋内競技場を見学

東京支部例会 54 名が参加

東京支部 7 月例会は 8 月 1 日（土）午後 2 時より清水建設倉林益太郎会員のお世話で、丹下健三氏設計の国立屋内総合競技場、主体育館の見学会を開きました。

この日は真中の太陽がアスファルトの道をとかす程の暑さ、産工試やインテリヤ、センター、スクールの学生さん達も加はり、54 名の大世帯になりました。

ブルトーザーで整地中の現場は、土ほこりで、靴もどろだらけ、清水建設現場事務所で建物の構造的特長や工事の苦心談などをうかがったのち、館内は仮設足場を取りはずし中で、南側客席から、白大理石を主とし、青くプールを浮き上がらせようとする室内計画や、照明などを見学したのち、会場の見える桑沢学園で懇談会を開きました。

出席会員から今後も会員が見学したい建物を月例会出欠返信を利用して募集し積極的に計画してほしい、さしあたりホテル大谷をとという意見が出され具体化を計ることになりました。

会 員 出 席 者

○渡 辺 優、○三 宅 正 郎、○中 村 圭 介、○山 口 勇次郎
○竹 内 篤、○鈴 木 富久治、○中 村 富 夫、○加 藤 昌 一
○内 藤 正 哉、○熊 井 七 郎、○鈴 木 栄 二、○野 水 ユキコ
○山 本 純 子、内 堀 繁 生、田 中 聡 行、西 沢 圭 三
井 上 猛、鎌 田 裕、大 泉 博一郎、倉 林 益太郎
井 上 ヒカル、中 野 和 枝、

宮 林 泰 明（日立化成）他 7 名
（賛助会員）

○柿 崎 哲 三（千代田グラビヤ）代理他 5 名（内 3 名 ○）

計 36 名

（なお、○印は懇談会出席者）

『デザインの方法論』

—— 東京6月例会パネル・ディスカッション ——

◇

◇ パネリスト 原 好 輝 (原デザイン事務所)
 坂 田 種 男 (千葉大研究室)
 広 田 長 治 郎 (広田デザイン事務所)
 白 石 勝 彦 (松屋デザイン室)
 榎 田 均 (産工試意匠部)

◇ 司 会 狩 野 雄 一

◇ 出 席 者

榎 田 均	原 好 輝	広 田 長次郎	坂 田 種 男
白 石 勝 彦	泉 修 二	岩 瀬 要 三	鎌 田 裕
狩 野 雄 一	武 笠 士 郎	内 藤 正 哉	中 村 圭 介
岡 本 賢 三	鈴 木 栄 二	鈴 木 富久治	竹 内 篤
梶 高 樹	高 須 英 彦	内 堀 繁 生	渡 辺 優
山 口 勇次郎	森 谷 延 周	河 端 二 郎	中 村 富 夫
吉 永 淳	有 川 勲 一	野 水 ユキコ	中 野 和 枝
井 上 ヒカル	(賛助会員)	宮林泰明 (日立化成)	他 3 名

計 33 名

☆ 3 つ の ア プ ロ ー チ ☆

狩野 この前のパネル・ディスカッションで、デザインから今回はデザインに対する方法について論議したらどうか、ということになりました。あと何回かの論議が重ねられるということ。前提としておねがい致します。

「デザインの方法」ですが、皆さんおのおのの立場からお話いただくわけですが、私は、一つの骨格というものがあるのじゃないか、と考へます。

第一に考えられることは<生活としてのデザイン>。生活ということは、機能とか用とか、そのための裏付けとしての造形とか当然なくちやならない。そのためにはひじょうに造形力を要し、人間工学の問題とかいろいろでできます、又造形には民族性とか国民性という長い伝統あると考えられます。

第2に考えられる方向は＜商品としてのデザイン＞。これは近代において、でてきた要素ですが、マーケット・リサーチだとか、購買動機調査だとかいう裏付も、当然出てこなきゃならないとおもいます。

第3に考えられるのは、構造・材料、つまり＜生産としてのデザイン＞。これには、構造・材料、およびその生産技術からのアプローチという問題がある。

そこで、デザインという山をのぼるには三つの入口があるとおもいますが、そこでもっとも基礎となるのは、造形力だとおもうのです。デザイン学生や若い人たちが、デザインは人間工学とマーケット・リサーチをやれば、それでもうできるように思うのはデザインを間違っただけで伝えられているんじゃないかと思います。

ともあれ、この三つのアプローチがあい、そのどれに一番重点をおくかということに、それぞれの立場とか経験とか、いろんな問題が入ってくるとおもいます。それでは一つお話いただきたいとおもいます。原さんから

原 ただいまおつしやったデザインの造形力ということ。これは、自分も同じ考えですけども、まず一番先に考えねばならぬことは、**デザインの自律性**だとおもうのです。使うとか作るとか、売るとかアプローチは純粋な意味のデザイン方法論からのアプローチではないとおもう。

デザインの自律性を確立することは、新しい人間の生活を根底とした新しい機構を作ることだとおもいます。

大量生産、大量販売の現代ではデザインの本質が曲げられるおそれをもっている。企業体や生産者側からみると生産性・市場性という問題が一番重要ですがそれだけでは発展性がない。

一方的な見方かも知れませんが商業主義的なスタイリングが相当多いようですがそれは、**企業者によつてデザインが左右され、デザインの本質が曲がってきている**せいじゃないかと思います。デザインの本質そのものの追及が自分たちの仕事だと思ひます。

人間の美への憧れが、伝統とか文化になって発展してきているとおもう。クラフトとかハンド・ワークという形でものを作るとか考えることが基礎で自分の作ったものを、多くの人に使ってもらいたい、というデザイナーの願いが、ハンド・ワークにも機械生産にも、同じく反映しているのでなくては意味がない、と考えています。

それから重要なのは個性の問題です。それはデザイナーの性格だとか、腕だとかが反映されるわけで、その追及力は、やはり体質的な造形感覚にありそこに個性が反映されてくる。結局デザインとは、用と美が一致しているものでなくてはその価値がないから社会性の中にデザイナーの個性を反映させたいと願っています。大体、そういつたところですよ。

デザインリサーチの確立を

坂田　私は、実際にデザインする上で、どういう形でやっているかを具体的に申し上げます。

狩野先生のいわれましたが、マーケット・リサーチは、売る人にあるていどイニシヤティブをとってもらい生産性の問題は、デザイン以後の問題としても扱えるが造形の問題はわれわれが考えなくてはならない。まずわれわれがしなくてはならないものに、デザイン・リサーチの問題がある。それが、デザインを行う基礎的だと思う。

このデザイン・リサーチにたった品物がマーケット・リサーチにのるか、あるいは生産性にのるかということになってくる。

造形の問題は、100人デザイナーがいれば100の異った物が出て当然で、デザイナーの個性を失わせるものであってはならない。しかしフアウンデーションですね。どういう方法でそれをやるかということですが、いまうちの学生たちにやらせていますがわれわれは、何をどの位収納する必要があるかということについてもハッキリした線をもっていたい。たとえば食器棚を側にとれば一体何を入れるのか。多分食器が入るだろうし、それが入れられるには抽出しも一つ二つあったほうがいいじゃないか……そういう、

ごく簡単な考えからフォルムを形成する。こういう状態でデザインするのは問題があるので、昨年から各人が食器関係・衣類関係・書物かその他の家具等を全部調査しました。その結果日本の生活の特色は、夏物、冬物、合服とあり食器も、洋食器、中華和食器と混沌としていてただ、それをしまう空間を作ろうとするとひじょうに問題が出てくる。これは今の住宅条件を反映した姿でいろいろ設備が完備してくると、暖房設備が入れば毛の下着はいらなくなるとか、台所に給湯設備ができれば水切り台が不用になるとか、いろいろの生活の変化がでてくる。そういうときに、われわれはどこを標準としてデザインするか、という問題が出てくる。食器棚なら一家族平均でどのていどのものをもっているのか。その食器がいわゆるスタックされたときにどのていどのマスをとり、一番とりやすい経済的スペースとしては、どういう場所が得られるのかそういう問題から、個々のマスをつかみそれからデザインにかかれると考えるのです。

しかし、持っている物を収納させれば良いということではデザインではないわけです。住宅公団に住んでいる人でも、重箱の所有者が多かったり、台所の抽出でナイフ、フォークの入るべき場所にソロバンから懐中電灯、鋏が入っている。それをどこまでチェックしていくか。個々のデザインに残される問題だとおもいます。色彩にしてもデコレーション・カラーとフアังก์ション・カラーには安全色とか刺激色という一つの方向づけが必要だが、デコレーション・カラーは自由で差支えない。それは百人百様のデザイナーの個性の中で生まれてくる。

しかし、インテリアデザインではどういう姿勢で生活しているかが解れば、そのなかに当てはめられるデザイン、そしてデザインの本質的なものから外れないデザインができあがってくるとおもいます。そういうデザイン・リサーチをやつて、その次にくるものが生産性の問題であり、あるいはマーケットリサーチの問題でありそしてそれらをまとめる造形性の問題だとおもいます。

生産と消費の円満な調和が

広田 私のデザイン論は、大体生産と消費の巡環論的なものです。われわれの住んでいる大地には、社会とか個人をくorumて人間のつくった世界と、自然そのものの世界が二つあって生産は自然なものを人間の世界に導入するはたらきであり、消費はそれが自然体の方に巡環してもどってゆくものである。人間が生まれて死んでゆき、植物が繁茂して枯れてまた自然に帰ってゆくように、自然から生まれて人間界に役立ちそれがまた自然にもどる。

その巡環がスムーズに行なわれている場合は、人間の世界は円満な調和ある状態でもつて存在する。。。そういう姿がデザインの目的ではないか。そしてその生産の方を土台にしたデザインのアプローチが、プロダクト・デザインのあり方で、商品の方のアプローチが、販売デザインとか宣伝デザインとなるそういうふうに考えているわけです。

先ほど原さんから、量産のためにデザインを歪められているという説が出たがぼくは、クラフトはクラフトの差しさがあり、量産は量産の美しさがありそれをどっちがどうという考え方ではこれからの生活のためのデザインを切り開くことはできないと思う。量産と少量生産とは、両々あいまって各々独自の美しさが追及されるべきだとおもう。ハンド・ワークで量産的な美しさも出そうとしてもできないし、また量産では、少量生産の多様性には対抗できないとおもう。これは両方の特性であって、一方が他方に変るのではなく両方を発展させるべきです。両方を発展させてこそわれわれの生活がより豊かになるというか、人間性復活問題に対しても益することになると思います。

それから、プロダクトデザインのアプローチでは構造・材料・生産性の問題がひじょうに強くデザインに作用する。そしてその中の合理性ができてくる造形の美しさの根幹になっている。これがプロダクト・デザインのあり方です。

一方、それに対する環境といいますかでき上がったものが集まって生活空

間を構成するということを先にアプローチにした場合には、生産的な概念を造形の問題に含んで出発することができる。これは両方が調和して総合的な美しさに結びつくことができるのであって、どつちがとっちといういい方はできない。最近の量産デザインの欠陥として、空間意識の不足があげられる環境的な方からアプローチしたものは、生産的な面のアプローチに欠けてるものがひじょうに多いようです。そういうものの総合的な視野にたつて、これからのデザインは進むべきじゃないかとおもいます。

実際にデザインする立場から

白石 方法論というのはひじょうに難しいのですが、私が実際にデザインしていく場合の考え方というものを一応まとめてみますと、まず、デザインする場合に個人的な活動と社会的な活動というのがある。その両方の相剋に悩み、その中で解決点を見つけながら仕事していくのが現実だとおもいます。その場合、どちらを優先させるかということは、そのデザイナーの個性になると考えたい。

個人の問題の場合、われわれがものを見る、きく、触れるとかあるけれど、せまい目でみてものを確めるのが一番中心で、フォルムの問題、造形性の問題になってくるとおもいます。

その造形性のなかで、芸術家的追及でなしに、生産の方式、技術、材料、機能の問題といつたものを、総合的に考えながら造形をまとめていく。あるフォルムにもつとも適した材料を考え、またその逆にある材料にもつとも適したフォルムを考える、と。そのなかで機能をどうまとめるかの仕事をしていきながら、生産されるまえのプロト・タイプをつくっていくことが、一番大切じゃないか。プロト・タイプができあがつて、それが生産に移される場合に、はじめて社会活動……（生産性、商品性など）と結びつき消費されることによりフィード・バックして、われわれ個人活動の糧となる。つまり機能とか技術とかを決定するための大きな栄養素となつて、個人活動が決定される。

そういう社会と個人の関係がどこで結びつくか私の感じでは、フォルムにもっとも適した材料、あるいは材料にもっとも適したフォルムを暗中模索しているときに、必ず材料なり工法なり、機能といったものを決断する必取に追われる。自分がその時のベストを尽して一つのものを選び出す基準というのは何かというと、その人のもっている人生観なり世界観というか、自分の過去の経験なり蓄積が基準をつくってゆく。そういう形で、思想性が問題になる。

今度は逆に社会性の問題では生産されたものがいかに市場性をもつかと考えるとそのもの自身の価値評価の問題が出てくる。本当に欲しいとおもっている人は、単価が高くても買うがいくらいいものでも価値が認められなければ売れない。価値評価の基準を個人々々が心の中につくっているわけですね。そういう場合、デザイナーがやったものをいかに価値評価して価格をつけ、それが売れていくか、という問題を考えるとそこにもやはり集団としての一つの思想なり、社会の動きがある。そういった点で、個人の選択をする場合の判断力と、使う側の集団の価値評価との結びつきの問題がそこに出てくる。

そういう場合、**「個人と集団」**ある場合には**「個性と社会性」**ともいえる**相対的關係でデザイン** がされてゆくんじやないか、と考えるのです。

現実とのズレを調整して

榎田 私はデザインの方法論は、一般的には何々工法とか、ページックな問題とされているとおもうのですけれども結局方法論は、各デザイナーによって違うのが当たり前とおもいます。

先ほどから、デザイナーの個性というような問題が出されておりますが、**個性を作り出す過程における方法論** マーケット・リサーチをやって、造形性の問題をやってこういう方法で組みたてるんだというふうに画一的に決めつけられるものでもないし、扱うものとか企業の実際の要求、あるいは企業の中とか外とかいう立場、また考え方によって、皆違って当然でこれを枠の中にはめこむということの方がいけない。しかし、デザインの方法論は必ず

しもハッキリしてないわけですがでも初歩の学生に教えるとかいう場合は、一つのコースがひかれている。然し現実には具体的な問題を決定し、形づくってゆくという方法論は、各自に違っているということです。

二番目に、白石さんのお話に出ました、**社会と個人**というもの。デザイナーの活動と市場における受け入れ態勢との間に、しばしば食い違いがでてひじように悩めます。産工試でデザインしたものは売れない、成績が上らないといわれる。現実の生活態勢と、デザイナーが考えている生活のとらえ方とのズレ……社会層もひじように範囲が広く、雑多なわけですね。「これ売れませんよ」というけど、一体何を基準にしているのかあいまいであり感じて左右しているのみだとおもいます。

でも、デザインを進める上には、感じの面がひじように大切に最後まで残るわけなんです。デザインの方法論もいろいろあるとおもいますが、**考え方**感じ方を、できる限り理論的に解明できる分野は解明して、最後に個性というものが加わってデザインが生まれるのじやないか思います。

人間工学とか、機能・生産性・加工性とかいわれますけれどもこれは当然デザイナーとして知っていなくてはいけないことです。日本では学問的な数学をひじように有難がり絶対なもののように思いがちですが実際使う場合にはバラつきが多くいろんな面からよく検討しなければならないと思います。**社会とデザイナーのズレという問題**は、どのような方法で埋めたらいいだろうか？私たちがいまやっております研究は、量産家具の機能分析ですがでも、これは量産ということを前提とする以上消費者層のかなりの意見を包括できるものでないといけないということをデザイナーもハッキリ意識する必要があります。

それで現在の欲求水準を知る意味で、住宅公団居住者の生活実態調査を行いました。公団住宅を選んだのはサンプルとして調査し易いのでとりあげたわけでこれが一般に適用するか、しないかという問題はありますけれどもそういうものの中から、一つのデザインを展開させるとか、方向性をうると

か、現実とデザイナーのイメージのズレがないようにするのも、一つの方法ではないかと思います。具体的な方法論となると皆さんに教えてもらわなくてはならないこともあるのですが、この二点をお話しました。

量産とクラフトは

狩野 五人の方にお話しねがいました。これから皆さんの自由な質問・討議にうつるわけですが、その前に一つ……原さんと広田さんはクラフトと量産についてやや方向の違ったお考えでした。この点について原さんと広田さんからもうちよつとつつこんだお話を願いたいのですが。

川端 (月建) 広田さんの人間界と自然界という考え方。生産と消費によってのバランスということは、ぼくも理想的だし、いいとおもいます。しかしデザイナーが、その中に介入することが難しい。また、クラフトがあくまでも量産の基礎だという考え方は、デザイナーの独立とか自律性が確立しない限りそういうアプローチはされないじゃないか、生産全体になってくると、人間が疎外されるという危険があるじゃないか。そこで自分は、デザイナーの自律ということが一番重要な問題で、これを確立してゆかないとバランスはとれないのじゃないか、とおもっています。

I . D . とクラフトは対抗的

広田 クラフトが結局 I D の基礎であるという考は、疑問だろうとおもいます。いい形をつくるということは、どれにも共通してあることだけど、多く作らなけりやできないよさ、というものがあるんですね。ところが片方、少くともよいというものは、バラエティに富むことができるし実際の生活でそれを享受する層の巾は、ひじょうに狭い。片方はぐっと巾の広い層を基準にして考えていますからね。このための量産でなきやできない美しさは、クラフトではできない。そういうものを前提として大衆にアピールしてるわけだから、クラフトはプロダクト・デザインの対抗的な分野として考えてるんです。一つは基礎で、一つはその発展というのじゃなくね。

それから I D というのは、ひじょうにオートメ化が進んで、均質性を重視

しているわけですね。しかし将来、オートメ化がもつと進めば、ある範囲のヴァリエーションをもたせる方法というのも進んでくるんじゃないか。均質性をもたせるための無味乾燥というのが大きな問題となり、同じ自動化でも、わりに多様性をもった自動化という方向に進んでゆくんじゃないかという気がしてるんですがね。そうすればクラフトが基礎だという考え方は、とらなくなるんじゃないかとおもいます。

原 ぼくのいうのは、クラフトのよさというより、デザイナーが仕事をするときの態度の問題なんです。それが量産化の場合には、どちらかという
と生産性が強くなるのは当然だ。デザインとは芸術的な意味が量産によって
欠けてくる。量産からはデザイナーがネグられがちなものだからこそ多くの
デザイナーが必要なのだと考えています。いかがでしょう。

狩野 今の問題についていかがですか。クラフトとかIDというのでなく
て、デザインの芸術的な意味と、量産という類型化の対立ということだとお
もいます。

原 結局、プロトタイプをつくるということですね。それが現状におい
て、一番重要なことだと考えています。

渡辺 原さんは家具の場合を考え、広田さんはIDを考えているのでない
か（録音不良）

広田 ぼくが考えてる量産というのは、少なくとも月産千～1万だというこ
とですね。100位は量産に入らない。量産というのは、近代工業における
量産です。

内藤 成型合板なんかではもっと少なくなくても量産になるんじゃないです
か、

広田 型の消却ができる数量と考へるのが正しいでしょう訂正します。たと
えば成型合板では月産100で充分処理できれば量産の概念におきかえられ
るでしょう。ただ成型合板の家具が職人の手づくりのいい家具より高くは
意味がない。数を造ると安くなることが量産の前提です。

泉 変なことをいいたすようですが、インテリア・デザイナーとは家具デザイナーなのか、ということですね。

デザイン・リサーチをマーケット・リサーチの前にやるべきだといわれましたが、自分のやったものがおかれる空間のすべてを作りあげてゆくのがインテリア・デザイナーだとも思います。すると、大量生産と、ハンド・クラフトの問題は、全部含まれてくるとおもうのです。

原 そうですね。要するに1つの製品のデザインでは、インテリアに入る場合、相当コンパクトに入るのがポイントのわけです。ですから、その場所ではしか使えない、動かさないインテリア・デザインもあるわけですけど、家具を考えると、やはりそれを入れることによってまとまるというのが、ぼくの理想としていることです。

泉 そうすると、インテリアをまとめてゆくときにも、大量生産の場合にも、クラフトという意識が必要なのか、ということなのですが……。

原 いやぼくは、ハンド・クラフトが必ずしもいいというのじゃなく、ハンド・クラフトとか量産ということを、現状では、あえて分離する必要がない。インテリアに関しては、ぼくはそうおもうのです。だから必ずしも、量産がいいものだ、ということにたってデザインすべきではない、とおもう。

狩野 では次に、坂田さんのデザイン・リサーチについて。

坂田 一般にマーケット・リサーチとデザイン・リサーチを混同されているようなので、あえてデザイン・リサーチと申しあげたのですけれど、デザイン・リサーチは、思想的な問題とか、量産とかクラフトかという以前に、誰でもが行なわなければならない問題と考えております。マーケット・リサーチは、こういう品物を作ろうとか、どういうものが売れてるか、T・Vとか新聞の広告媒体調査……これが、マーケット・リサーチですね。

しかし、売れるものをデザインするためにも、デザイナーとしてもう少し考えたい。というところから、デザイン・リサーチが出てくると考えます。

デザイナーは生活のしかたを変えれば、新しい機能が生まれることを、知

っているが、ユーザーとかメーカーとか、販売店は、一般に全然知らない。新しい1つの試みを市場に出すための基礎的なデータを取り。こういう条件からこれが生まれてきたということを、ユーザやメーカーが納得するだけの説得するだけの説得力のある資料をつくらなければならない。そうした基礎的な力がほしいために、デザイン・リサーチをしたいというふうに考えています。

加納 産工試で行った生活実態調査は、どういう項目でやられているのですか。

榎田 項目は(1)伝統の問題。例えば琴三味線とか長火鉢、脇息をもっていますか。使っていますか……。そういう問題から、その所有率・使用頻度を、年令・学歴・収入別に照合してみると、案外若いデザイナーが、観念的に決めつけられないような具体的なデータが上がってくるわけですね。

また次に、現在の家具を、どのようにもっているか、使っているか、どんな部屋に置いているか、誰が使うかというような問題。

(3)に寛ろぎ方ですね。生活空間には、どうしても寛ろく問題を追及しなくてはというわけで寛ぎ方の調査。覺の上にベタといきなり座るか座らないか。寛ぐとき浴衣を着るか着ないか。椅子に腰かけるかどうか……。これを先ほどの年令とか学歴とか収入、といったものと同じく合わせてみるわけです。

(4)生活行動の問題家具と、家庭生活といえますか、読書・食事・料理・団欒接客、そういう生活行動を20種のタイプに分類し、どの部屋で、どんな家具を使ってみるか……。これが一番大きな、この調査の問題点で、タテ・ヨコのクロスした調査用紙でやったわけです。これによりますと、使用頻度の多い部屋とか、そこにおかれている家具とかが一見して解りいろんなことが読めるわけですが、そのためにひじょうにややこしい表になりました……。

(5)食器関係では食器の所有状況。スキ焼とか鍋料理とかの昔からの料理用器具があるがそれが、現代の食生活にどの程度残るのか。目安をつけるのが目的でやりました。

(6)床意識の調査。玄関からスリッパ・畳・じゅうたん・トイレのスリッパなど。床の意識がひじょうにいろいろ変るわけですね。畳の上には素足だがじゅうたんは、スリッパであがるとか……、ずい分いろいろ細かい差があり、西洋に比べ床意識がかなり高い。西洋は、靴ばきであがってゆくから、地面と同じような見方にある。こういう床意識と日本人の生活行為が関係がある。そこで、これからの椅子の方向に結びつけたいと思ってます。

(7)接客の方法これをどうやるか。お客のためにスペースを開けておいて、1週間にとの位お客がくるか。そのとき誰が応待するか。家庭なみの接待か、あるいは事務的か……。

(8)現在の部屋の構造ならびに家具についての不満。この不満は狭さからくることが一番多いですね。その中でとくに目立つのは、天井まで使えるような収納棚をつくれとか、隅で使うコーナー、キャビネットを作れとか、TVの脚の下のような、余分なスペースを、もったいないというわけです。

それをそのままマトモに受けとめるわけにはいかないと思うが、まとまれば何らかの方法で、皆さんにもお目にかけたい。

500世帯を調査して、回収率はひじょうに高かった。都内と、神奈川を調査員が1軒1軒まわってチェックし、2〜3回にわたってやっていますから、回答内容もでたらめではないんです。

坂田 私の方では衣類関係だけ集計してあるので申し上げますと表のようです。大体1.38リコーベというものが衣類箆司といった形で外へ出てくる。ですから、家具の需要は、現在各家庭とも、1.38リコーベ入る収納空間がほしい、ということです。

然し、それだけのものを作ったら室はよけいせまくなる、公団住宅に入ったら、一般住宅と違う生活状態をもたなければいけないし、暖房の設備をすれば収納空間は少なくてすむかもしれない。そういうふうに考えています。

狩野 そういうデザイン・リサーチを、あとどのように利用されるのですか。

榎田 データとしてまとめ量産家具の設計条件の1つに組みこもうというわけです。そういうことによって、1つのプロトタイプなり、実験住宅までいけばよい、家具から室内というものの試作を試みようという構想なんです。

狩野 たとえば、収納空間リサーチでは、吊棚とか天井とかあらゆる空間を利用したら、ということをはっきりと示すだけでなく、デザイナーとしての主導性をもちこむことが必要になります。

日本人の生活に定着したもの

榎田 産工試の場合は試作までしか考えていなかったけれど、私どもが使っている家具が、あまりにも、明治以来西洋から入ってきたままで、もっと日本人の考え方なり生活に密着し、定着すべきでないかと思う洋家具とか和家具とかいう既成概念に、しばられずに、現代の人間生活に立脚した家具を、やらなくてはいけないという問題から、そういう方向に入っていたのです。

狩野 大体洋家具とか和家具、という名前からおかしいですね。応接セット、などという名前も大正初期の文化住宅時代に輸入されたヤツが、そのままずっと受けつがれたものだ。つまり応接は来客のためのものだが、実際に使っているのは家族です。そういう現実に対し、これからの生活はこうあるべきだ、という主張の基礎的なデータになるのじゃないか。

榎田 1つの収納空間を決めるのにも、着物は全部畳み方が決まっているから箆司で充分間にあうんですよ。洋服、とくに婦人用の洋服は、どうやつてしまうのが一番いいか、われわれがトコトンつきつめないと……。

二重生活が問題

狩野 ところが、日本の女性は、和洋両用の衣生活なんですね。収納もその両面をそなえていかないと。それに日本の季候というのは四季がハッキリしているから、冬と夏と合服と、膨大な衣料所有量になる。衣類でも食事でも、全部2種構造なんですね。何か生活のあり方を考えなくては、家具の山の中で暮しているようなことになる。

坂田 日本では暖房か冷房がいずれかが必要なのではないのでしょうか、こ

うした設備のあるヨーロッパの住宅の収納空間は、大体日本の $\frac{2}{3}$ 以下、ときには半分になるのじゃないですか。

狩野 日本人の床意識は靴をぬぐから足の裏の感覚が発達した。外国の場合はぬがないから、外も内というので外をきれいにする、あれは履物からきている。日本は靴をぬぐから、室内での床意識はキメが細いが、外をきれいにしないんだ……。

榎田 椅子の所有状況ですが。中産階級とかホワイト・カラーの入っている公団住宅は、所有率が高いかと思ったのですが、案外少いんです。その原因は狭さじゃないかと思うのですが。最初は応接セットとか休息椅子を買いこむのですが、1年2年たつと、そういうものをつっぽらう傾向がある。年令別では、40代が一番所有率が高い。これも、若い人が多いと思ったら、逆なんですね。椅子がまだかなり高価な生活用具といえるようです。これはちょっと意外でした。

狩野 婚礼道具は、日本の生活空間を毒してますよ。あれはほとんど収納家具で。親はどこにおくかまで考えないし、もってく方も、親が買ってくれるからでもって行くが。ほとんど6帖か4帖半のアパート住いで、入らないから親類に預けてある人もいる。

榎田 調査によると季節によって家具の配置をかえています。プランをみただけでもおもしろい。ベッドは割合少いですね。でも2段ベッドは割合ある。フランス・ベッドでも割合多いけれど、実際そこで生活してないですね。

中村(圭) 二段ベッドはフトンよりも多く寝られるからですよ。

狩野 食堂のセットと居間のセットをご破産にして、リビング・ダイニングの両方を兼ねたものを作ることが考えられないか？食卓の高さを低くするわけです。そしてイージーな椅子で食事でもでき、食後の団欒もできるもの…これはやはり、日本的な生活様式じゃないか。

寝て食うだけの公団住宅

榎田 公団の2DKとか3DKとかは、要するに食って寝るだけの人間し

かみていない、6帖と4帖半、多くて3間です。こういう狭さだと、寝かつ食う、ほかに生活する場がほとんど見出せない。それに相当するものが、ダイニング・キッチンで、食卓セットやリビング・セットをもちこんだり、兼用させたりしている。それに食器棚・テレビ、冬は暖房がいる。もう瓜先立って歩かないと歩けない。

苦情欄には、4DKないし5DKないと文化的な生活はできない。がんばってくれ……などと。

白石　われわれよく、公団住宅の中のデザインについて相談うけますが、公団住宅は、インテリア・デザインの対象にならない、絶対面積が狭すぎると返事をしてるわけです。

これは先ほど話した、個人生活の欲望と社会性の問題と結びついてくる。公団住宅を是認しなきゃならないのは社会態勢に問題があるので、そこでは生活すること自身が、ひじょうにしいられた状態でされてる。そのための喫茶店、映画館、バーなどが、居間の延長的繁囂気で住宅の中では満足できないものを、外部でのリクリエーションで満足させることが多くなるんじゃないでしょうか。

最近、セカンド、ハウス……という言葉がありますけれど、都心のアパートに住んで、今までの別荘と違った個人的な生活の場を、別に求められなければならない状況が、都市の生活の中に出てきているんじゃないか、極論だと思いますが。

私自身公団住宅に住んで、こうした矛盾を感じるわけですが、経済生活その他でセカンド・ハウスをもつのは、ひじょうに問題が多いと思います。

集団生活と単独生活との間の生活の違いを、もっと考え、集団生活によって得る利益と、それによって損失する個人の生活とのバランスをかけた場合に、どうしても集団化しなきゃならない。

その場合に、日本人がどういうふうに生きるかを考えると、先ほどの必要でないものはなるべくもたないという方向にゆかざるをえない。

その辺から、消費文化というか、消費経済的問題も生まれてくると、現実の公団住宅の生活を云々することと平行して、いかにして4～5DKまで持ってゆく社会的基盤をつくるかということも大切だと考えるわけです。

作るものの個性使うものの個性

狩野 この秋通産省・東京都・デザイン振興協議会主催で展覧会をやることになり協会も協賛のため打合せ会に5～6回でしたが、消費者の立場で、豊富な商品から選択するテーマもとりにあげることになったものが多く、扇風器でも10社ぐらいから出てる。一体どれがいいのかわからない。豊富な商品からどれを選ぶか、は選択と調和しないんじゃないか？

では、そういう立場を選んでくれといわれると、また困るんですがね。消費者も実に困ってるんじゃないか。受け入れる家が貧弱で、中に入るものばかりデザインされている。そういうアンバランスの実態ですから、家以外にセカンド・ハウスというものができてくる。……

矢名氏 消費者側の選択の基準というのは、今まではかなりモードの面から選ばれているようですね。

作りたいものを作るのが一番素直

白石 さきの話にちょっとつけ加えると、買うほうも作るほうも個人です。デザイナーは皆、自分の作りたいものを作り、その中から買いたい人は、自分の欲しいものを買う。

つき放すような言い方ですけど、作る態度は、原さんのいわれました自律性の問題と、ひじょうに関係があります。売れるから作るのではなしに、自分がこれを使いたいから作ると。それがたまたま、欲しいと思っている人がいれば、その価値を認めてくれる、という考え方ですすめればいい。しかし、全然ルールなしにやるのでなしに、だんだん大きな形である1つの方向が出てくる。

その辺のところで、今度は完全な個人主義の問題と結びつくと、自分の個性がハッキリし、作る方にも買う方にも出てくる。作る方の個性は、形や機

能を決めたりするさいの決断力がつくりだし、買う方の場合には選び出すときの考え方の中から個性がハッキリ出てくればいい、ただその個性がたえず前向か、いい方向に向いているかどうかが問題だと思いますけれど、われわれが使う人に、個性ある生活をするような方法を説得する態度をとらなければ、いつまでたってもバラバラで進歩がありません。いい意味での主導性といいますが、自主性・自律性をもたなくてはならないと思います。とにかく、あまり売れる売れないとこだわらないで、やはり自分が作りたいものを作るということが、一番素直じゃないかという気がします。

然し、これは、デザイナーが一般人より優位にたっているということじゃないのです。一般の人は、少くとも専門的な立場で考えている人たちの言葉を、もっと聞くべきではないかと思うのです。

生活のしかたのいいわるいの判断は、難しいと思うのですが、少くとも見栄とか外聞とか、優越感に支配されて、自分自身の生活が乱れるというのは駆逐しなきゃいけないんじゃないか。

坂田 私なんかもよく女子学生にいうのですけど、椅子を買うとか家具を買うとか、少し分に過ぎるものを買って、それを使いこなせばそれが基礎になって先に進める、われわれも裸電球で生活するんじゃなくて、環境をつくるのが大切なことだと思います。

疲れが休息にひびく

中村(主)NHKの余暇時間調査をみると、グロッと横になって莫然と過して人が実に多いですね。これは受動的な生活態度ですが、日本人は労働時間が長い上に通勤で疲れる。それで休息の仕方が消極的でラジオ・テレビを長時間ダラダラと無選択に見ることになるのだと思う。

狩野 休息の時間にも個性がないわけですね

<遊び>は大切だ

白石 ひじょうに大きな問題だと思いますね。たとえば楽しむとか享楽するということに罪悪を感じていた時代と、われわれのジェネレーションとでは

多少違う。われわれ、ノンビリ遊んでるとわるいみたいな気持が、多少ありますね。現代の若いジェネレーションは、それを相当割り切ってる人たちが多いわけです。

デザインとは楽しむためにあるんで、苦しむためにあるんじゃないとすると、本当にいい意味での遊びとか楽しみを知らないと、デザインできない。デザイナーの要素の中に、＜遊び＞は大切だと思います。

坂 田 そりゃね。人間形成の問題だね。日本人は、教えられて人間を形成してゆく教育方針を取っているみたいだが、アメリカ人とかヨーロッパ人は自分で自分を形成してゆく、ということに努力している。だから一般消費者が、良い物を見る目を自分で作ろうとすれば、いいデザインはどんどん売れてゆく。

狩 野 いいデザインのものが売れるにはひじょうに時間のかかるところが努力せずに止めてしまうから、悪いものばかり、数よけいに出ることになる。

深刻な住宅問題

原 大体、公団住宅そのものが、なかなか当らないですね。

中村(主) 公団住宅は良い方でアパート住いが相当多い都市の住宅の広さは大体1人当り3.69畳(昭和38年経済白書)で、昭和16年の3.74畳を下回る状態です。

公団は国民生活水準から見れば良い方です。国民所得に対する住宅投資の率も欧米よりも低く耐用命数も少くない木造が主なので住宅難は解決の見込みがないというのが現状です。

狩 野 住宅投資の問題は、日本人の潜在意識があるようです。『この世は仮の住まい』という意識があるんです。だから住宅には金をかけない、わびしく、つつましくというわけです。だから、なかなか成長しないのは、そういうせいだ。

狩 野 大分今日は、広範囲にいろいろな話が出ましたが、大体時間も来ましたので終りたいと思います。

結局デザインの方法ということは、こうこうこうあるべきだということはない。やはり各デザイナーの問題として、異った方法がある。しかし根本的には個性の問題が中心になって、デザイナーとしての活動になるのじゃないか。それをもちたてエレメントが機能性なり、マーケティングなり、材料工法である。そのとらえ方には、いろいろな方向があるということが解ってきたことで、私は成功ではないか、と思います。

今日はタマタマ、調査の問題でかなり日本の現状に触れた話も出ました。なお私たちはこういうディスカッションの中に、やはり用語の問題がかなり重要なことが解りました。

それでは、これをもちまして、第2回のパネル・ディスカッションを終わります。

新 入 会 員 御 招 介

幸 重 篤 典 (ATUNORI YUKISHIGE)

大正14年11月1日生

東京工業専門学校を卒業し宮崎大淀高校の助教諭を経て、現在、福岡県福島工業試験場大川木工指導所でデザインを担当している。

地元、大川製品のデザインを指導した、座卓子、ブックストッカー、和風セットなどの製品5点が提出され、室内にも度々作品を発表している。他の入会者と同じように東京支部委員11名審査を受け、7月の理事会で入会が承認された。

推薦者の鈴木富久治氏は、河内先輩のあとをつぐ、大川の技術的指導者として、真面目な人格と良きセンスを、同じく、今井滋氏は大川での経験から日本の既製家具の指導的デザイナーの1人としての活躍を期待して会員に推薦された。今後、建築インテリアに対する理解も深め、より充実した作品を望みたい。

現住所＝福岡県柳川市新外町4-6 TEL 柳川 4.458

勤務先＝大川木工指導所 TEL 大川 3259

漆 原 美代子 (MIYOKO URUSHIHARA)

昭和10年3月10日生

東洋女子短大を卒業後米国に留学、ミシシッピー洲立大学生生活美術科、プラット、インスティテュート、オブアート、インテリアデザイン科を修業しジョージネルソンの事務所にも勤め34年から鹿島建設の囑託をする外、小田急

百貨店のコンサルタントや多摩美で教壇に立つなど、多角的な活動をしている。

作品はK氏のゲストハウスとリツカー会館（銀座）重役室会議室等の家具で、著作としては、インテリア・デザイン（彰国社単行本）の外新建築、建築文化インテリアなどにオフィスインテリアを発表している。推薦者は新庄晃 山口勇次郎の両氏で「その経歴と仕事の内容から、十分本会の正会員の資格がある」と推薦している。協会としても、初めての女性正会員で、今後が期待される。

現住所＝練馬区中村北 1－19 TEL（991）6862

勤務先＝鹿島建設設計部 TEL（501）8301

多摩美術大学

小田急百貨店

大 和 勝太郎（YAMATO KATSUTARO）

昭和2年3月10日生

早稲田大学建築学科を昭和25年卒業以来池田建設、高島屋東京店、日本産業工芸デザイン室長を経て現在設計事務所を自営している。

提出作品は、FOTINI号の船室、出雲大社庁舎家具、日生会館食堂、福田屋大食堂（宇都宮）等で、1960年アルフレックス ドムスヨーロッパコンクールに椅子のデザインが入選している。

推薦者、長大作氏は第12回トリエニナレー展の際、現地で監理事務を手伝ってもらった経験と円満な人柄を認め推薦者山岸陽氏は帯欧3年の経験から生まれた広い視野と豊かな知識を認め推薦されました。

現住所＝東京都港区赤坂青山北町 6－4 6 三原堂ビル内

TEL (4 0 2) 5 5 8 2

事務所＝同上事務所自営

土 屋 晃 一 (KOICHI TSUCHIYA)

昭和 8 年 2 月 1 4 日生

静岡大学教育学部で工芸を専攻、昭和 3 3 年より静岡県工業試験場意匠課に勤務、家具インテリア等の設計に従事している。作品としてはスツール、棚、ロビーの家具等で、第 4 回国際家具設計コンクール（イタリアカンツ）及び第一回コスガ家具設計コンクール等に入選している。

推薦者の鈴木富久治氏は コンペ入選の実績を認め若く真面目で有能なデザイナーとして 推薦者の松村勝氏は箱物家具産業を廻りにかかえて地道な解答をしながら 新しいイスのフアンクションを求めてやまない態度を認め推薦しています。

現住所＝静岡市聖一色 4 0

勤務先＝静岡県工業試験場工芸部意匠課

峰 尾 武 (TAKES MINEO)

昭和 8 年 1 月 2 日生

都立工芸高校を経て日本大学経済学部を卒業し東横百貨店、徳島工芸指導所に勤務、現在伊勢丹で設計を担当している。

富士フアニチアの Q 形椅子、コニット式収納棚、ノックタンモエアーなどの家具で、推薦者の山口勇次郎氏は、富士フアニチアの新製品で通産大臣

賞を受けたデザイン力を、今井滋氏は注文家具で実際面に接し多くのコンペに入賞した実績をかわれ推薦している。

現住所＝東京都八王子市高尾町 1, 6 1 8

勤務先＝株式会社伊勢丹

T E L (3 5 2) 1 1 1 1

直 通 (3 5 2) 5 4 4 6

準 会 員 入 会 社

橋 口 優 昭和 1 3 年 1 1 月 2 3 日生

鹿児島県立加治木工業高校、木材工芸科を卒業し、そごう東京店、パシフィックハウスを経て伊勢丹装飾係に勤務、今井滋氏の推薦。

現住所＝東京都府中市美好町 1 - 1 9 - 1

勤務先＝伊勢丹外商部家具装飾係

T E L (3 6 9) 1 1 1 1

内 線 2 4 0 番

宮 武 佳代子 昭和 1 9 年 3 月 2 0 日生

女子美短大造形美術科を卒業し産工試装備意匠研究室の研究生として実務についている。推薦者の榎田均氏は、「ダイナミックなアイデアと誠実な態度を認め」推薦している。

現住所＝世田谷区代田 1 - 7 2 8

T E L (4 2 2) 1 0 3 2

村 松 洋 雄 昭和18年1月6日生

神奈川県立神奈川工高の木材工芸科を卒業白木屋、東横の設計室に勤務している。

推薦者の内藤正哉氏は「入社後1年で著しいデザイン面での生長を認め、下向きの努力とデザインの研究の能度から将来の生長を期待している。」

現住所＝横浜市神奈川区神大寺町922

勤務先＝株式会社東横設計室

TEL (461) 0111

内線 276番

高 沢 信 枝 昭和13年5月1日生

日本女子大住居学科を卒業高島屋設計部を経て下記に勤務している。推薦者の三宅正郎氏は「女性と思えぬ荒けずりな所と発想の面白さがあり、もつと深く掘り下げて行けば必ず良いものが生まれてくると期待している。」

現住所＝東京都渋谷区代々木1-2

TEL (371) 3032

勤務先＝年輪デザインセンター

TEL (661) 0863

会 員 の 近 況

松 村 勝 男（フリー）

7 月末より台北の PRESIDENT HOTEL の家具試作のチェックに台北に出張中です。

武 笠 士 郎（フリー）

7 月 20 日を以て、東横設計室を退社しフリーになり「武笠士郎設計研究所」を創設されました。

設計室 浦和市瀬ヶ崎 2 7 1

TE F 0 4 8 8 - 3 2 - 3 0 0 7（夜間 0 4 8 8 - 2 2 - 7 6 9 4）

東京連絡所 千代田区神田小川町 3 1 8 青桐ビル

TE L（2 0 1）8 0 3 9

三 宅 正 郎（フリー）

日本建築学会、東京建築士会その他の団体協賛によるオリンピック記念
“ 第一回日本建築祭 ” の紋章デザイン募集に応募され、優秀賞に入選されました。

有 川 勲 一（桂工務店）

バー・セントルイスを設計監理中です。

山 岸 陽（高島屋）

5 月 13 日工芸家高橋節郎氏の御媒妁により香代子さんと結婚されました。

野 口 寿 郎（フリー）

天童木工の役員に就任されるとともに天童ビル内に野口寿郎デザイン研究室を開設されました。

住 所 変 更

岩 瀬 要 三 (川島織物 K K)

南多摩郡多摩町桜ヶ丘 1 丁目 5 7 ～ 7

梶 高 樹 (日本鋼管造船所)

目黒区八雲 4 丁目 1 6 ～ 3

山 口 勇次郎 (フリー)

世田谷区代沢 1 ～ 2 4 ～ 1 1 4

山 岸 陽 (高島屋)

練馬区春日町 1 ～ 2 2 1 1 みどり荘内

湯 山 武太郎 (K K 東横設計室)

世田谷区北沢 2 ～ 1 0 ～ 1 4

理事会を前に支部委員会 — 東京・大阪両支部 —

東京支部では、理事会提出議案等の審議のため7月14日夜、芝で支部委員会を開催した。

尚、文芸美術健康保健組合の保健料振込の保証の件については、現在東京支部会員のみが加入しているので東京支部が保証人となることになった。

大阪支部では7月11日午後6時より委員会を開催し、理事会提案事項として資格審査内規を審議し、選考表は現行のものとし理事持廻りとせず理事会で決定する事を決めた外賛助会員の促進等並びに審査所属問題について審議した。

事務局だより

暑中お見舞申上げます。皆様相変らず御多忙中のことと存じます。

理事会の審議の過程で、東京大阪両支部の活動状況に相当な違いがあることが明らかになりました。

事務局が確立していない現状ではだれかの好意による努力で会が維持されているのが現状でそうした犠牲をできるだけ多くの人が分担することによって会の動きを活発にし、できるだけ早く事務局を確立するようにしなければならない。

作品集の発行・九州支部の結成準備・新入会員の増加など、明るい面も出ています。

室内設計家の地置の確立のためにもこの協会はぜひ必要です。大阪の皆さんも協力して会を盛り上げるようお願い致します。（中村記）

世 界 樹 種 総 覧

- ◇ 日本木製品技術協会より“世界樹種総覧”が発刊されました。
これは各樹種の木取面、学名、産地、立木、丸太の状態、材質
用途などが記載されており、建築、家具など広範囲において参
考になると思います。サンフツドの150×210の見本板で
100枚入り ￥3,500円

- ◇ グットデザイン展 64' 作品募集

主 催 日本デザインコミッティー

テーマ 家具・照明器具・インテリア フアブリック（カーテ
ン、カーベット他）

締 切 9月末日

（出品作品は10月19・20・21日に搬入）

連絡先 東京都千代田区平河町1～2中政連ビル内

日本デザインコミッティー事務局・鹿子木健日子

T E L （262） 3139

- ◇ 大阪支部事務所移転

大阪支部事務所は下記に移転しました。

大阪市東区淡路町2-34

株式会社 安井 建築設計事務所内

日本室内設計家協会大阪支部

（202）3836（呼） 事務担当者 荻野 幸男

日本室内設計家協会

東京都港区芝田村町5の15 今成ビル内

TEL (431) 4 9 0 3

振 替 東 京 7 6 3 8 9